



惑星ユゴス

夢遊星人

くるえるストーリーズ

惑星ユゴス

夢遊星人 作

一破られた手帳より一

?月1日

今日から日誌をつけることにする。いつの日かこの手帳を目にする人があることを期待して、始めから書こうと思う。もっともそんな日は来ないかもしれない。それはどうでもよい。私は自分の慰めのためにこれを誌す。私はいつこの船に乗せられたのだろうか。私がこの囚人護送船の中で意識を回復してから、どれだけの時が経ったろうか。この船内に閉じこめられる前から、私は意識を喪っていた。目を覚ますと、私はバース（寝台）にくくりつけられていて、船は発進していた。その間にどれほどの時が経ったのか、その後どれほどの時が経ったのか、私はまったく知るすべがないのだ。

今私は時を計る正確な尺度を持たない。腕時計は意識を喪っている間に奪われた。船内には時を刻む器械は一切備わっていない。そればかりか、ここは地獄だ！ 人を一日でも放りこんでおけば、すっかり脳髄の機能を麻痺させる部屋があるとすれば、まさにこの息詰まるような船内だ。何か特別人の気を狂わせる仕掛けが、毒々しく仕組まれているというのではない。実にその反対だ。

奥行き4メートル、幅二メートル半の卵形の船内は、実にあっさりとしていて、必要最小限のものだけがあり、それだけに人の気を狂わしくする。部屋のどこが狂わしいというのではない。ただ、この密閉感だ。絶えず同じ形をした壁によって封じこめられているという、この耐えがたい圧迫感――この圧迫感から逃れるために、ただ何でもよいから、周囲の壁から注意をそらすために、この日誌を書きはじめた。私は一人ぼっちだ。私は自分の運命について考えることにする。

私は時計を持っていないから、今日が正確には何日であるかを知らない。私の睡眠のリズムが一日を決定する。そこで便宜上、今日を?月1日とする。目覚めるたびに、私はその日付を殖やしていこう。

政治犯の烙印を押された者は、ユゴスへ流されると聞いていた。私の行先もそこだろうか。太陽も一個の明るい恒星にすぎないほどの、暗黒と酷寒の徒刑地、信じがたい伝説のようにかつて聞き流したその地獄の惑星へと、今送られて行くのだろうか。だが、どんな惑星であれ、そこにはさえぎるもののない無限の天があるであろう。足下には踏みしめる氷の原があるであろう。こ

の出口のない檻の中よりは、どんなにかましだろう。悲惨な労役を強いられようと、そこには言葉をかけあう仲間が、人間がいるではないか。今の私にはユゴスさえ、極楽のように憧れられる。だが・・・私の心には、ふいと考えるだに慄然とする疑念がわいてくる・・・私の胸は、鋭い絶望の錐でえぐられる・・・ああ、考えまい、考えまい・・・。

?月2日

ある日突然逮捕され、職場から連れ去られて以来、私は家族からも、友人からも、いなすべての人間から隔離されてしまった。私にはしばらくその理由がのみこめなかった。この船で目覚めてから、初めて一つのことに思い至った。それは私がある内輪の機関誌に、一篇の詩を載せたことだった。それはこの頃では珍しいことだった。大焚書時代からこのかた、詩というものはめったに書かれない。詩人は狂人の一種と見なされるようになり、稀には過去を愚弄するよすがとして、そんなものが慰みにされることがあった。私自身、余興のつもりで、先例にならったまでのことだった。

それがかくまでお上の逆鱗に触れようとは、今でも信じられないのだ。ただ一つ、私に罪があるとすれば、背番号のかわりに、たわむれにハンドルネームというものを使ったことであろうか。これは今思うと、確かに私のうかつな失策であった。私はそのために、贖罪の旅へとのぼせられているのであろうか？

?月3日

船にはかろうじて頭が通るほどの小さな窓が――今私が寝そべてこれを書いているバースの左右に、一つずつある。そこからペイン（硝子）に目をつけるようにして外を覗くと、針のような無数の星が、暗い宇宙に瞬きもせず、ふりまかれている。これだけ沢山の星の中では、もはや地球で親しい星座の姿は、ほとんど見分けることができない。“スター・ダスト”――普通の旅であったなら、私は感傷的に呟いてみたかもしれない。星屑のようなおのれの存在に、メランコリックな瞑想をそそられて、星雲の果てまで夢想を翔けさせたかもしれない。しかし、今私にはこの暗黒の宇宙は、恐怖のほかの何ものでもない。

私は地球の職場で逮捕されてから、直ちに月を巡るステーションへと送られた。あらゆる犯罪者の最初に送られる流刑地である。そこで暗黒の部屋に何日も放りこまれていた。その間、何一つ取調べを受けたわけではない。もっとも、私の心は彼らには硝子の箱のようであったろうが。通常、犯罪人はこの特別のステーション――かつての時代には裁判所というものがあつたそうだが、人々は忌み憚るように、このステーションに名を付けることをしない――ここでそれぞれの量刑にふりわけられるのであって、申し渡されるのではない。犯罪人は、刑を執行されることで、初めておのれの運命の何たるかを知るのである。これは、今私自身犯罪人となって、確かめえたことである。

そのステーションで、ある日の食事のあと、私はひどい眠気に襲われ、そのまま床に倒れてしまった。気づいた時には、私はこの囚人船の中にいて、いずこへとなく宇宙に漂っていた。この船が孤立したカプセルであることは、推定できる。犯罪者の中でも、特に重罪と見なされた

者は、独房船で宇宙に流されることを、私はかつて耳にしたことがある。私の運命はそれであろう。

だが、その運命を私自身の心に言いきかせ、納得させるまでには、どれほどの懊悩と、不安と絶望を経たことだろう。私は大声に叫びたて、壁を、窓を、狂った熊のようにたたき回り、体を投げ、わめきつづけ、あまりの運動に、部屋の酸素補給のバランスがくずれ、それでなくても希薄な空気の底に、私は終いに窒息しかけて、手足を痙攣させて横たわった。

そのまま眠りが襲った。浅く、不安な夢にさいなまれた睡りを眠った。目覚めると、そこに相変わらず壁があった。じっと耐え、耐え、耐えられなくなると、私はまた一人狂い回った。私は自分がこれほどの愚人で、小心者であることを、今ほど感じたことはない。一体この壁を破って、私はどこへ出ようというのか？一瞬たりとも生存しえない宇宙空間に飛び出すことを、私は願っているのか。

そんなふうな狂乱と眠りを、私はいくたびくり返したろう。今は声もかれ、涙も出ない。五体は朽木のように、あちこちが痛む。

私はこの日誌を付け出したことで、いくぶん冷静さを取り戻したようだ。

?月4日

冷静になることだ。不安にはやる胸を鎮めて、理知に耳傾けることだ。ああ、しかし暗い絶望がすべてを押しつぶしてしまう。どこに望みがある。ユゴス・・・はたして、ユゴスが目的地であるか。それとも・・・悪魔の囁きのような暗い噂が、記憶のどこかにただよっている・・・。

書くというささやかな仕事を持つことで、心はいくぶんか落ちつきを得る。すべてを整理してみよう。目覚めるたびにすべてが悪夢のようだが、しかし眼を開けても悪夢は消えてくれない。逮捕・・・ステーション・・・失神・・・独房船・・・死！

船内は静かだ。最初に意識を回復した時から、エンジンは止まっている。必要な加速をつけたのち、今は惰性で飛んでいるのだろう。どれほどの速度で飛んでいるのか、どれほど地球から離れているのか、計器類が何一つない以上、知る由もない。“彼ら”の定めた運命のままに、この操縦者のない船は、彼らの定めた軌道をつき進んでいく。遠い記憶から、私はユゴスへの旅程をさぐりだしてみる。半年？ 一年？ あるいはもっと短かっただろうか？

私は二つの小窓に交互に眼をすりつける。せめて太陽を望むことができれば、どれほど地球から離れたか、見当をつけられるのだが。わずかに30度程の視野を望むにすぎないこの小窓は、おまけに陰険な設計者のたくらみから、卵形の前部にくりぬかれていて、後方にある太陽はその片鱗さえ覗うことができない。もとより青く輝く地球の姿もない。その他の惑星も、日光に煌く浜辺の砂のような星々の中から、見つけることができずにいる。しかし慣性飛行を続ける以上、ユゴスの軌道に近づくとつれ船体は太陽の方へ向くわけだから、太陽が見えだせば、それは目的地に近づいたということになる・・・。

期待・・・どんな悲惨な状況の中でも、ささやかな期待は生まれる。

?月5日

私の罪について。再び考えてみる。大焚書時代と俗に言われているが、正しくは大合理化時代 Great Age of Reason だ。この時代に、あらゆる書物の大整理が行われ、いわゆる文学と称されるものが、根こそぎこの世から消去された。文学ばかりでなく、歴史の大部分、思想の大部分が、人類の記憶から抹消された。特に政治というものが Cartesius に統合されてからは、無用の学問、制度となって、図書館からも、大学からも、現実社会からも Politics と称するものは消え去った。唯一 Cartesius だけが残ったのである。こんな小学生でも知っていることを今さら書くのは、私のどこに間違いがあったかを、原点に戻って反省するためだ。

かつての時代の文学や歴史に触れることは、その愚劣さの教訓として大目に見られていた。風刺的な詩や作物は、時おり公にされることがあったので、その才ある者には、良い気晴らしであった。私の書いた詩は Mighty Atom というつまらないものであった。

Mighty Atom is sorry,
Mighty and sorry.
He is a Machine but is a Fool:
He can feel and be sorry.
Man is holy but foolish;
So he created Mighty Atom.
So Mighty Atom is a fool,
And sorry for himself;
And man is also sorry for himself!

私としては伝説上の最初のヒューマノイドであった Mighty Atom を風刺したつもりであった。しかし見ようによっては、これは Cartesius への当てこすりを取られかねないではないか。合理化の権化であり、この数百年にわたり人類の合理化を進めてきた唯一の政治権力である Cartesius が、Fool であるわけではないのだが、人類が自らの支配を Machine に委ねることになったことへの風刺ととられかねまい。私にもちょっとした油断があったのかもしれない。

おまけに、公にハンドルネームを使ったことだ。オサムシという昆虫の名を名乗ったのが、理性的存在の尊厳に違背したのであろう。公には誰もが背番号を用いる。生まれつきそれ以外の名、もしくは識別ナンバーを持たないのだ。全人類は、r もしくは h で始まる 9 桁の識別ナンバーを割りふられている。r は reason, h は heart であると、通常理解されている。生まれた時の遺伝子情報によって、この振り分けがきまるのである。もっとも、このイニシャルには別の意味を当てはめることができるが、それを声高に言う者はいない。

?月6日

今日一つの発見をした。かすかながらこの宇宙船は回転している。卵の長軸を中心に、実にかすかながら回転している。一日にせいぜい1,2度か。それは星を観察していて分かったのだ。日を計るおおよその目安にはなりそうだ。そんな小さな発見でも、多少は心強くする。

昨日、船内の食糧を改めて調べてみた。前に大ざっぱに調べておいたが、妙に気になって、残

りの食用ピルを数えてみた。全部で55個残っていた。思うに、もし私がユゴスの徒刑地へ、まがりなりにも送られるとするならば、その残ったピルの数は、残りの航程日数と一致するに違いない。その程度の彼らの配慮を信じたいような弱気になった。

しかし万一の場合を考えて、またこれまでも日の経過の錯覚から、余計の分量を食していたかもしれないし、これからは半分ずつ食べることにしよう。

その他の装置も調べてみた。エアプロバイダー（空気浄化器）は順調だが、つねに希薄感を覚える。少し動き回ると、たちまち呼吸がつまってくる。狂乱状態のときに、何らかの衝撃を与えたのが原因かと、今さらながら悔いにかられる。ウォータープール（給水装置）はリダクター（還元装置）ともに順調。今の割合で行けば、一年は飲料にこと欠くまい。おのれの排泄物を飲むかと思うと、いつもながら味わい飲む気にはなれない。

?月7日

左の窓から、カシオペアを見つける。右の窓から見えるのは、コロナ・ボレアリス（北の冠）か。どうやら船は黄道北極方面へ向かっているようだ。地球の軌道面から、ほぼ直角に太陽を巡るユゴスの軌道に、無事交わることを今は願う。

?月9日

なにを書けばよいのだ。書いてどうなるというのだ。人間の孤独に対する持久力は、こんなにも弱いものか。この二日間、起きている時はイライラと、この狭隘な檻の中を動き回った。どこへぶつかっても壁、壁、何千遍、何万回と見なれた物質の障壁だ。せめて重力装置のコントロールができれば、宙に浮かぶ気晴らしもあったろうが。

部屋の中には角というものが無いのは、単に安全のためばかりだろうか。これも彼らの考え出した陰険な拷問の一つではないか。眼を開いていても、閉じていても、じわじわと眉間を圧迫するこの閉所感。少しでも違ったパースペクティブを得ようとして、あれこれ姿勢を変えてみる。無駄なあがきだ。この卵形の空間がどう変わるわけでもない。無駄と分かっているがあがくほかはない。不安・・・先の分からない不安・・・それが壁の恐怖をいやが上にも高める。

どうして私は行き先がユゴスであると、たやすく思いこむことができたのだろうか。それよりもはるかに恐るべき運命が、囚人を待ち受けていることを知らないのか。彼らの気まぐれな指令一つで、この船はどこへでも飛んでゆくではないか。どこへでも？

宇宙の中で行く先を失った船の運命は知れている。屍を乗せた棺桶となって、暗黒の空間をさすらうまでだ。あるいは、この可能性が第一だが、ユゴスで待ちかまえている囚人サルベージ船に拾いあげられなければ、この船は軸を180度変えて、灼熱の光球の中で、火に飛びこむ蛾のような最期をとげるまでだ。どんな悲惨な可能性も、彼らの無慈悲な指先一つだ。

?月10日

ああ、こんな明白なことを私は考えまい。考えまいとしてきた。考えまいとすることで、私の神経はかえって麻痺した。私はもう自虐的に、最悪の事態を強いてこの日誌に記そうとしている

。そしてうつろに笑う。ヒステリックに哄笑する……。私は宇宙に棄てられたのだ。重罪人の運命である、死への追放に処せられたのだ！

わずかばかりの水や食糧が、今や何と嘲弄的に、私には思われることか。最終的な苦悶を増すだけの、心理的拷問ではないか。彼らの魂胆は分かっている。それでも生きたいと思う、最期まで……。恐怖と不安のほかの何ものでもない生存ではあれ……。生きたい!……。という欲求でとことんさいなもうという……。

?月11日

不安と絶望と孤独の底で、人間にただ一つ残されているのは、自らをさいなむ快楽であることを知った。何という狂える自虐的な快楽。一瞬あらゆる苦悩は、むしろその快楽をアクセレレートするかのようだ。

?月15日

もはや睡眠のリズムが壊れてしまって、浅い眠りを幾度もくり返すので、日を数えることもこの先無意味となろう。これからは食用ピルの残りで日を数えよう。

?月?日

ピルの残りを数えてみて、すっかりあわててしまった。この前数えた時の半分近くになっている。果たしてそれだけの時が過ぎたのかしらん。確かに、カシオペアの見える位置がだいぶ変わっている。時を計る基準であった睡眠のバランスを失ったことで、食欲のバランスまでくずれてきたようだ。食事量を半分にしたので、常に空腹だ。だがいずれそれも四分の一にしなければなるまい。

?月?日

ひどく体が弱ってきたようだ。常に息切れがする。窒息で死ぬか、餓死するか、いずれにせよ長くはあるまい。

?月?日

長いことバースに寝そべったままで、動かずにいた。目をつぶったり、開いたり、浅い眠りに落ちると窒息しそうな息苦しさを覚え、はっと目覚める。こんな状態がどのくらい続いたのか。ふと見ると、一方の窓からきわだって明るい星が一つ射しこんでいる。星座の位置が、かなり移っているようだ。太陽の引力に牽かれて、船の傾きが増してゆくのであろう。おそらく楕円軌道の遠日点に近いのであろう。

ふとその星が太陽ではないかと思った。何と遠くまで流されてきたものだ。もはやユゴスの軌道さえ、越してしまったのかもしれない。このまま宇宙の果てまで、幽霊船となって、双曲線上を漂いゆくか、再び引力につれもどされて、地球を形見に見ながら、火炎の中へ突入するか。いずれにせよ、長い命ではない……。

* * *

r 2 5 - 1 7 5 4 9 2 6 「h 1 3 - 6 5 9 7 8 1 2の件は片づいたか」

r 2 2 - 5 6 4 7 5 3 9 「順調に運んでいる。非合理破壊レベルほぼ99パーセントに達した。もう次の処置に移ってよいと思う」

r 2 5 - 「その前に見ておこう」

二人そろって、ステーションの端のプラネタリウムに赴く。ドームの扉を開けると、がらんとした半円形の空間に、通常のプラネタリウムとは違って、中央の架台に巨大な卵か繭のようなカプセルが載せられている。投影機はそのカプセルの先に、あたかも不気味な黒い蜘蛛のように張りついている。既に投影を終えて、丸天井は真っ白である。

r 2 5 - 「h 1 3 - 6 5 9 7 8 1 2の様子はどうか」

r 2 2 - 「ここ数日昏睡に陥っている。たとえ目覚めても、自意識を回復することはないはずだ」

r 2 5 - 「1パーセントの非合理性を残したのは？」

r 2 2 - 「被命令機能を潤滑にするために、従順性感情を残しておいた」

r 2 5 - 1 7 5 4 9 2 6とr 2 2 - 5 6 4 7 5 3 9は、そろってモニター室に入る。モニターにカプセル内の様子が映し出される。バースの上に男が仰向けに寝ている。死んでいるようにも見えるが、計器は心拍と呼吸を伝えている。脳波形は平穏で、規則的な波を打っている。

r 2 5 - 「理想の脳波といえる。r化インストール・プログラムが支障なく進みそうだ。ところで、彼の横に落ちているものは何か」

r 2 2 - 「hの間ではやっている、紙の手帳という骨董品である。きっと何かを書きつけるだろうと予想して、わざと取り上げずにおいた。すべて思想モニターにコピーしてある。読んでみるか」

r 2 5 - 「いや、その必要はない。hのたわごとは、何度となく目を通して、こう言うのもなんだが、辟易している」

r 2 2 - 「非合理を破壊するには、非合理をもってするのがもっとも効果的である。hに好きなようにさせておくのも、r化プログラムの一部である」

r 5 2 - 「ザッツ リーゾナブル（もっともである）。それではさっそく、h 1 3 - 6 5 9 7 8 1 2の次の処置に移ろうではないか」

r 2 5 - 1 7 5 4 9 2 6とr 2 2 - 5 6 4 7 5 3 9は、モニター室を出て、h 1 3 - 6 5 9 7 8 1 2を運び出すために、巨大な卵か繭のようなカプセルに向かって、タラップをのぼった。

(「惑星ユゴス」完)